# 夢と漱石と寒月君

Junko Higasa

気温 32℃を記録した翌日の 7 月 19 日は秋のように涼しかった。その夜、私は久しぶりに心地よく眠れて、珍しい夢を見た。私はよくストーリーのある夢を見る。

夢の中で私は漱石展会場前にいる。煉瓦色の壁面のガラス張りの掲示板には夏目漱石関連の記事が貼ってあり、その前に揉み上げから顎にかけて髭の生えた一人の男性が立っている。この展覧会には一人一人ガイドが付くので順番に案内するという。私が持っている札は 50 番だった。すぐに「50 番の方どうぞ」と言われてその人が呼んでくれたが、会場に入る前に「質問に答えてください」と言う。この問いのはっきりした記憶はないが、私は「高等遊民」と答えて入口に案内された。先の掲示板のある壁面の左端に二階に上がる階段があって、階段の左壁面にも掲示物があって、上がるとすぐ左手にガラスの陳列ケースがあった。そして部屋の床は木でできていた。夢はそこで終わった。全くリアルな夢である。磨かれた床の色や光沢まで覚えている。

それから雨の 21 日は家にいたので、机上の読み止しの「寺田寅彦随筆集第五巻」を久しぶりに手に取った。読んでいる間なんとなく不思議な気がする。漱石が頭上で微笑んでいる感覚があるのだ。いつかも寺田寅彦随筆集を読んでいるとき、同じ感覚があった。私の意識の中には漱石の微笑む顔がはっきりと浮かんでいる。漱石は着物を着ている。その状況の中で、私は随筆集の中の『吾輩は猫である』に引用された出来事を読むと同時に、漱石と寅彦の温かい関係を感じずにはいられなかった。

寺田寅彦が『吾輩は猫である』の水島寒月君のモデルであるのは周知の事実だが、ここでは彼が中央公論に連載した「自由画稿」の中の以下の 2 つの話を紹介しよう。

『猫』第三章で、娘の縁談相手の寒月君の素行調査のために、苦沙弥先生に「鼻子」とあだ名をつけられた金田夫人が乗り込んでくる。金田夫人が難しい学問から話題を転じて『―この御正月に椎茸を食べて前歯を二枚折ったそうじゃ御座いませんか』(以下引用：岩波文庫)と聞き、鼻子「余程歯の性が悪いのではないか」迷亭「まだ充填せずに空也餅をひっかけている」と展開される会話がある。実際、寅彦は父親に似て歯が弱かったのか、子供の頃から虫歯に悩まされた。徴兵検査で思った以上の虫歯が発見されて、とうとう前歯が蝕まれ始め『いつかどこかでごちそうになったときに出された吸い物の椎茸をかみ切った拍子にその前歯の一本が椎茸の抵抗に負けてまん中からぽっきり折れてしまった。夏目漱石先生にその話をしたらひどく喜ばれてその事件を「吾輩は猫である」の中の材料に使われた』とある。空也餅は漱石宅の菓子鉢の中にあっただけで、歯を充填しなかったのは歯医者の処置に懲りたせいだ。この引用のお蔭で「その出来事は 28 歳の頃であったと立派に考証される」と寅彦は書いている。

また鼻子が「何か(寒月君)当人が書いたものはないか」と聞く場面では、迷亭によって「狸を描いた絵葉書」が選ばれる。これは寅彦が子供の頃聞いた話で『後年夏目先生の千駄木時代に自筆絵はがきのやりとりをしていたころ、ふと、この伯母のたぬきの踊りの話を思い出して、それをもじった絵はがきを先生に送った。(中略)さっそくそれを利用されて作中の人物のいたずら書きと結びつけたのであった』とある。

寅彦の天真の愛嬌を、漱石がいかに楽しく受け止めたかが忍ばれる。　(2012.7.21)